

馬居 第5章 概要（要約）

第5章

- 1 勤務する学校に配布された機器に対し、ICT教育やGIGAスクールで求められる機能を9種の質問項目に分類し、「できる」（事実認識）と「必要」（評価）という二つの問いによって、小学校教員が手にするPCタブレット機能の認知度と授業での必要度に潜在する二重のズレ（事実認識と評価の差異、9項目間の差異）を明らかにした。さらに、その理由を辿ることから、「1人1台」、全ての子どもに手渡す高度な機器を、精密な制度設計（既存システムとの整合性）なく無償配布した日本の公教育史上、唯一無二の出来事、と位置付けた。
- 2 現行学習指導要領に明記された特別の教科も含めた教科11種と3領域に対し、「活用しやすい」「活用しにくい」「どちらかといえば～～」を組み合わせた4段階の尺度と「活用していない」を加えた5種の選択肢によって、「1人1台」の「活用のしやすさ」の問いを設けた結果、小学校教員の活用度の高さと低さの型と14種の教科等の特性を把握した。さらに、5種の選択率の対比から、日本の小学校教員を支える教育システムの中核を形成する下記4種の小学校教育の仕組み（法制度が統制する教育システム）を開示した。
 - ①教員一人が全教科等を教える“学級担任制”
 - ②獲得知識より学習の場の共有を優先する“履修主義”
 - ③居住地⇨“学区制”と学年⇨“年齢主義”による就学条件の固定⇨非選択制
 - ④“学習指導要領”・“検定教科書”・“無償配布”による“教育課程の統一性”
- 3 上記4種こそ世界に誇る日本の小学校教育の“優位性”であると同時に、「1人1台」によって顕在化した“脆弱性”であることを踏まえたうえで、学校教育DXの課題と可能性を解き起こす起点になることを願って、4種それぞれに、合わせて26項目の実践項目を記載した。そのうえで、下記3種の調査、研究、実践化の協働論議のテーマを提起した。
 - i 実証データ（evidence）の構築（タクティクス1）
 - ii 学校教育のリアル（実践知）の言語・映像化（タクティクス2）
 - iii Diversity&Inclusionの視座の日常化（ストラテジー）

★上記概要（要約）に応じた主要図表3点（掲載ページはキャプション右横の赤字）

2 「できること」と「とても必要」のズレ

2) 「できること」と「とても必要」のズレ（差異）

図5-2「できる(白)」(選択率高位順)と「とても必要(斜線)」の選択率一覧図

P3

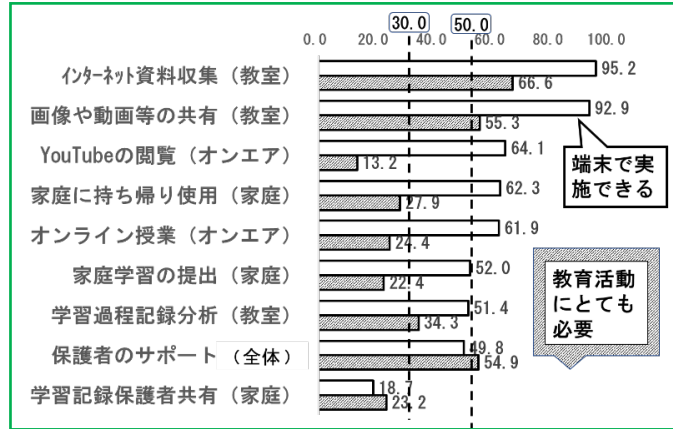
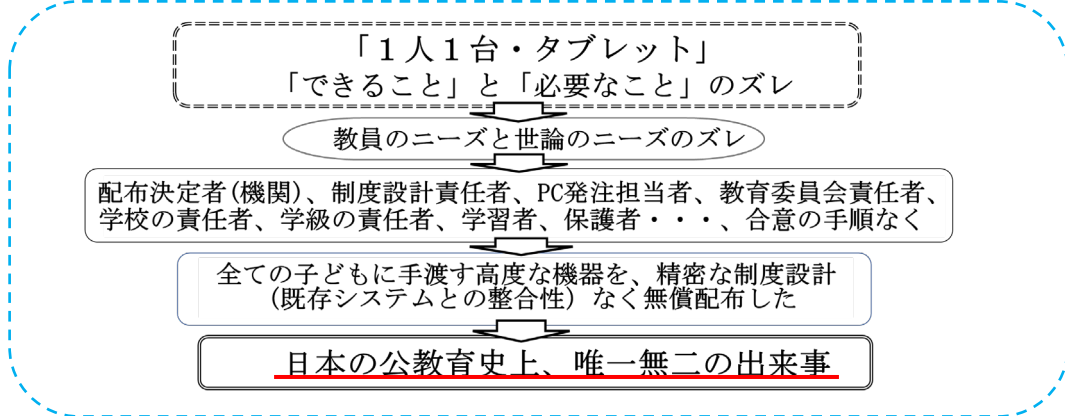


図5-3「できる」と「とても必要」にズレが生じる社会的文脈のモデル図

P4



3. 学校教育 DX に向かう課題は（その是非と可否を問うことから）

1) 教科等別の「活用しやすい」の割合から見えるのは

図5-4教科等別「活用しやすい」の順位別と「どちらかといえば活用しやすい」の積み上げグラフ一覧図

P6

